広報 中部の森林（もり）

写真：「秋の段戸湖」（愛知所管内）

私の森語り「竹ってホントに邪魔物ですか？」
NPO法人いなだに竹Links 代表 曽根原宗夫

特集
・㊞㊞木曽ひのきブランド化10周年記念イベント
各地からの便り
・伝統技法の継承に向けて(三ツ緒伐り研修会)
・「森の学校」と「秋の森マルシェ」に参加　ほか
シリーズ
・森林官からの便り、私の森語り、中部の保護林、
　秘蔵写真・今は昔の林業

国民の森林・国有林
林野庁中部森林管理局
2023/No.236

ブランド材で未来をつくる「㊞㊟木曽ひのきブランド化十周年記念シンポジウム」

【中部森林管理局・木曽森林管理署】

十月十八日、㊞㊟木曽ひのきブランド化十周年記念シンポジウムを木曽郡の「上松町ひのきの里総合文化センター」にて開催しました。

当局では、平成二十五年度より、木曽谷の国有林野から産出される林齢八十年生以上の良質な高齢級人工林ヒノキを「㊞㊟木曽ひのき」と称して販売しています。本シンポジウムは、高齢級人工林ヒノキのブランド化を通じて、今後の木曽地域の林業・木材産業の発展を考えるとともに、情報発信の機会としたところ、木曽地域の林業・木材産業の方々、町村関係者、当局職員など、約二〇〇名が参加しました。

同時開催されたブランド材製品と林業従事者写真コンテスト作品の展示

主催者を代表した挨拶で今泉局長は、「木曽谷特有の厳しい自然環境で生育した高齢級人工林ヒノキは、年輪幅が密で木柄も良く、天然木曽ヒノキに勝るとも劣らない材質を持つ点が評価され、ブランド化が進められてきたものであり、当局ブランド材の第一号」と経緯を説明し、この間に多くの皆様の努力により、各方面からの評価をいただきながら、十年という節目を迎えたことに感謝の意を伝えました。

ブランド化を提唱した当時の局長であるノースジャパン素材流通協同組合の鈴木信哉理事長には、「㊞㊟木曽ひのき誕生の経緯と木曽谷林業の将来展望」と題した特別講演をしていただき、当局管内に設定した「木曽悠久の森」と高齢級人工林ヒノキのブランド化の関係を振り返り、将来展望として、

①天然木曽檜の供給を続ける
②㊞㊟の品質安定供給（伐採計画は品質で産地バランス良く計画）
③㊞㊟超々高齢級施業方針と特別表記の検討（百五十年、二百年伐期にする場合の施業方針など）
④㊞㊟の業界認知度向上（製品への表示方法統一など）
⑤表木曽・裏木曽時代も踏まえ協調
⑥高齢級人工林ヒノキの扱い（民有林でも同じ品質のものの扱いを検討）
⑦用途を多様的に開発・定着（従前用途に付加／高級建具用材としてのヒノキ柾平の製造、ホテル高級部屋向けなど）
⑧主製品用丸太以外の有効フル活用（伐根や背板端材の活用、節だらけ材の販売など、すべてムダなく使うカスケード産地化）
⑨搬出コストを考える（全木集材で立木材積フル活用など）
⑩㊞㊟以外にも関心向ける（カラマツ、アカマツ、広葉樹）
⑪地元加工工場の維持・拡大
⑫木曽谷すべて木造化・木質化方針

などについて提言され、最後に「木曽路は、すべて山の中である」と結ばれました。

鈴木理事長による特別講演の様子

その後、当署の若手職員が企画した「突撃！木曽のひのきはいったいどこへ？」を放映しました。これは、木曽ひのき材で住宅を建築している会社の方に木材にこだわる理由やお客様のニーズ、木材生産者に望むことなどをインタビューした動画で、長崎県の谷川建設と長野県の美し信州建設の方

にご協力いただきました。

続いて、令和三年に開庁した木曽町役場本庁の設計にあたった千田建築設計の千田友己共同代表から『木の國・木曽の「文化と産業のシンボル」としての庁舎建設』と題し、川下側からの視点で講演していただきました。

千葉県に事務所を構える千田共同代表は、「初めて庁舎の敷地を訪れた時、木曽谷の山をしっかりと正面に見ることができるような真っすぐの平屋建てを考えた」と語り、一般公募の設計プロポーザルで選ばれた設計について、朱色の大屋根の上に越屋根、木曽地域の伝統的な出梁造りから考えた「出梁ユニット」を組み合わせて屋根を支える構造。更に、構造材には木曽産を使用し、常に山とともにあることが日常的に感じられるような場所とし、建築と社会とが相互に影響し合う有機的な関係についても説明されました。

そして、「穏やかな立ち姿でありながら、強く町のシンボルとなっていけると良い」とのメッセージを伝えられました。

最後に「木曽ひのきブランド材の今後を見据えて」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

コーディネーターに鈴木理事長、パネラーとして、信州大学学術研究院の植木教授、上松町の大屋町長、株式会社勝野木材の勝野常務取締役、木曽官材市売協同組合の原田副理事長兼専務理事、当署の郷原署長が登壇して木曽谷の林業・木材産業の将来等について意見を交わし、前向きな発言や新たな提案に会場から大きな拍手がおくられました。

パネルディスカッションの様子

限定企画として実施された木曽町役場庁舎見学

木曽町役場庁舎建設の講演に耳を傾ける参加者

多くの見学者が見守る中で倒れるヒノキの大木

先輩から指導を受ける様子

伐採した木の梢を切り株に挿して山神に感謝

伝統技法の継承に向けて（三ツ緒伐り研修会）

【東濃森林管理署】

九月八日から九日の二日間、恵那市岩村町の岩村国有林にて、三ツ緒伐り研修会を開催しました。

三ツ緒伐りとは、三ツ紐伐り、三ツ伐りなどと呼ばれる立木の伐倒方法で、立木へ三方向から斧を入れ伐倒します。手順としては、伐倒方向から見て左右に二箇所、伐倒方向とは逆に一箇所の弦と呼ばれる部分を残した状態で立木をくりぬき、伐倒方向とは逆に残した弦を伐ることにより正確な方向へ伐倒する方法で、貴重な木材を伐倒する際に用いられています。

この伐採方法は、伐倒する際に生じる材の芯抜け（伐倒した際に中心部が切り株側に残ってしまうことにより、木材の中心部に穴が空いてしまうもので、木材の最も価値のある箇所へ損傷を与える）、割裂（伐倒した際、木材が割れたり裂けたりする状態になること）、胴折れ（伐倒した際、木材が途中で折れてしまうこと）などの木材への損傷を与えないことはもとより、林業の作業で最も危険とされる伐倒作業を安全に行える方法として、江戸時代前にはこの方法が用いられていたようで、今日でも、伊勢神宮の式年遷宮用の御神木伐採等ではこの方法が用いられています。

今回の研修会は、この伝統技法の継承に向けて、神宮司廳営林部、上松三ツ紐伐り保存会、裏木曽三ツ伐り保存会より四十名の杣夫に集まっていただき、三団体で混成チームを四組つくり、先輩杣夫からのアドバイスを受けながら、各組一本ずつヒノキ（胸高直径約六〇センチメートル、樹高約二五メートル）を伐倒しました。

普段は見ることができない伝統技法を一般の方々に公開したところ、百名を超える方々が見学に訪れ、迫力ある伐倒風景をご覧いただきました。

この伝統技法の継承に向け、引き続き、協力してまいります。

※三ツ緒伐りについては、当局ホームページの「木曽式伐木運材図会」もご覧ください。

六者協定に基づく大学院生を対象としたフィールド実習

【技術普及課・東信森林管理署】

九月十三日、大学院生二十二名を対象に、東信署管内の浅間山国有林にてフィールド学習を実施しました。これは、平成二十八年度に、筑波・山梨・信州・静岡の四大学と関東局・中部局を合わせた六者間で締結した「山岳科学の発展に向けた連携協定」に基づいて、毎年協力している取組です。

参加した学生は、山岳科学に関連する教育、環境、都市計画、植生や昆虫など、それぞれ幅広い分野の研究を行っていますが、林業に関する実習は初めての学生がほとんどで、今春にカラマツエリートツリー展示林を設定した「清万採種園」を案内し、カラマツ林業の発展には、種子の安定供給、エリートツリーのような育種技術の導入が必要であることを学んでいただきました。

その後、カラマツ造林地に移動し、下刈り回数の削減による造林費用の抑制、伐造一貫作業などの林業の黒字化に向けた取組、新しい林業に向け期待される新技術について説明し、最後に「くくりワナ」の実演を行いました。最近、ジビエが注目されていることもあり、鳥獣被害に関心を持った学生たちから多数の質問があるとともに、成長が早いエリートツリーの強度や割高なコンテナ苗の普及率など、研究者らしい着眼点からの質問もみられました。

森林・林業への関心を高め、林業や木材産業への就業機会の促進にもつながるよう、継続して学ぶ機会の提供に取り組んでまいります。

カラマツ造林地の説明を聞く大学院生たち

国有林を活用したマウンテンバイク大会の開催

【木曽森林管理署】

九月十七日、木曽郡王滝村の国有林林道を舞台に、ＳＤＡ王滝クロスマウンテンバイク大会が開催されました。王滝村は総面積の約八三パーセントを国有林が占め、良質な木曽ヒノキをはじめ木曽五木の産地として知られています。林道の総延長は約三〇〇キロメートルにのぼり、同じルートを通ることは殆どないワンウェイでコースを設定することができます。

天候にも恵まれた大会当日、王滝村長によるスタートの号砲を皮切りに、国有林の雄大な自然の中を、全国から訪れた約千二百名の選手が、最長の一二〇キロメートルのコースなどを駆け抜けました。

御嶽山麗のコースで高低差が大きく、未舗装の凸凹道も多いため、選手は大変苦戦された様子でしたが、大きな事故もなく終えることができ、選手からは「御嶽山やダム湖を横目に、普段は走れない国有林のコースを堪能できた」「来年も参加したい」との感想が寄せられました。

翌日には、四二キロメートルと二〇キロメートルのダートマラソンも開催され、約百七十名の選手が参加しました。

また、今年の七月には、王滝村、上松町の国有林林道において、トレイルランニングレース「ＯＳＪ　ＯＮＴＡＫＥ１００」が開催され、約千三百名の選手が、二日間にわたり一〇〇マイル（一六〇キロメートル）か、一〇〇キロメートルのコースを走りました。人口約六百七十人の王滝村において、両大会のもたらす経済効果は大きく、今後も地域のニーズに応えていきたいと考えています。

国有林内を走り抜ける選手たち

「森の学校」と「秋の森マルシェ」に参加

【南信森林管理署】

十月三日、上伊那郡飯島町の町有林において、小学四年生を対象とした町主催の「森の学校」が開催され、児童約七十名が参加しました。

「森の学校」は、里山を身近に感じ、森林の能力や働き、森の大切さを学ぶことを目的に、十年以上前から開催されており、長野県上伊那地域振興局、飯島町、当署の職員が講師を務めています。

今回、当署では、森林の土壌の働きについて理解してもらうために、五名の職員で「目隠しイモムシ」と「土壌実験」を行いました。

目を閉じて足の裏の感触を確かめながら1列になって歩く「目隠しイモムシ」

土壌実験では、ろ過装置に見立てた二本のペットボトルに、それぞれ校庭の土と森林の土を詰めて、水を注ぎ、浸透の違いを観察しました。土を詰めるところで、それぞれの重さが全く違うことに気づき、森林の土壌は空気をたくさん含んでいるから軽くてやわらかいということを発見し、更に、ミミズや微生物のおかげで空気をたくさん含んだ森林の土壌が、水を吸収して、ゆっくりと地下に通すことで土砂災害が起きるのを防ぎ、きれいな川がつくられることの説明を受け、学びを深めることができました。

更に、長野県の職員が行った間伐体験では、慣れない鋸を使いながら、森林整備の必要性や大変さを感じていました。

今回の体験で、自分たちの身近にある森林には多くの機能があり、それに人々の生活が守られていることに気づいてもらい、森林・林業に少しでも興味をもってもらえれば嬉しい限りです。

また、十月七日には、伊那市鳩吹公園において「秋の森マルシェ」が開催されました。

今年も多くの児童が全身で学んだ「森の学校」

「秋の森マルシェ」は、伊那市が策定した、伊那市五十年の森ビジョンを実現していくための民間主体の支援組織である「伊那市ミドリナ委員会」が主催したイベントで、今年で二回目となります。

今回は、林業、木材産業、建築業等の関係者など、二十四の団体等が参加し、木工教室やワークショップ、各種販売などが行われました。

気持ちのよい秋晴れの空の下、多くの人で賑わう中、当署では輪切りにした木材に電気ペンで文字や絵を描く「ウッドバーニング」を行い、開始から終了まで絶え間なく親子連れが訪れ、順番待ちの予約をしてもらうほどの人気ぶりでした。

なお、公園内では、農林業をテーマとしたスポーツ大会「ノーリンピック」も開催され、三人一組でトビを巧みに使用し、障害物を乗り越え丸太を運ぶ「林業レース」、地元産のリンゴを食べ比べて品種を当てる「リンゴ食べ比べ」などの種目に、延べ九十名が出場しました。当署は林業レースのアマチュア部門で優勝を飾り、会場を盛り上げました。

これからも、関係者と連携し、地域の森林・林業の発展に寄与できればと考えています。

体験をサポートする職員

シリーズ

森林官からの便り

国有林の現場の最前線で、働く森林官の仕事や、管轄する地域の特色などを紹介します。

【飛騨森林管理署
白川森林事務所】
森林官　熊澤　智史

白川森林事務所は、岐阜県の北西部、世界遺産「白川郷・五箇山の合掌造り集落」と「どぶろく祭」で有名な大野郡白川村に所在し、村の中心部を流れ、富山、そして日本海へと注ぐ庄川両岸の水源部に位置する、約一八、五〇〇ヘクタールの国有林を管理しており、人工林は七三五ヘクタールのみで、ほとんどがブナやカンバ類を主とした天然林です。

管内の西側には、石川県と接して日本三名山の一つで山岳信仰の山としても有名な「白山」があります。富山の立山と同じように白山という山は存在せず、御前峰、大汝峰、剣ケ峰の三主峰群とその周辺の山からなる連峰の総称が白山と呼ばれています。

温泉の成分によりエメラルド色に輝く白水湖

白山周辺は、大半が原生的な天然林であり、その自然環境を保全するため、「白山森林生態系保護地域」（七、七六四ヘクタール）と、各保護林を連結して野生生物の生息・生育地のつながりを確保し、森林生態系の多様性を図るため「白山山系緑の回廊」（約一七、〇〇〇ヘクタール）を設定しています。

白山への登山道の一つ、平瀬道登山口がある大白川国有林には、白水湖（大白川ダム）、白水滝のほか、飛騨白川郷自然休養林があり、「白山ブナの森キャンプ場」や「大白川露天風呂」など、キャンプ・ハイキング・登山等のシーズンには、多くの人で賑わいます。

また、馬狩国有林には、石川県白山市につながる有料の山岳道路「白山白川郷ホワイトロード」が通っており、白山国立公園の絶景ドライブが楽しめます。その途中には令和四年にリニューアルされた白川郷展望台があり、展望デッキからは眼下に白川郷、天気のよい日には遠くに立山連峰などの山々が望めます。運がよければ、雲海に出逢えることもあります。

この地域は豪雪地帯で水量が豊富なため、発電用ダムや関連施設が多数あり、国有林の貸付が当事務所の主な業務となっており、林野巡視や境界管理なども行っています。

白川郷展望台　天空のブランコ

■未来の担い手へのメッセージ

よりよい自然環境と貴重な森林を後世に残すことが私たち国有林に求められている役割と思っております。興味のある方はぜひ一緒に汗を流しませんか？

筆者

シリーズ

「私の森語り」

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に挑戦されている方の取組を紹介します。

「竹ってホントに邪魔物ですか？」

NPO法人
いなだに竹Links 代表
曽根原 宗夫

■自己紹介

飯田市天竜川の舟下り船頭として二十三年間、川の上で過ごしてきました。舟下りの舞台である鵞流峡という渓谷にゴミの不法投棄が目立ち、その原因は放置竹林が暗く生い茂る環境だと気づいたことから竹との関わりが始まりました。

「天竜川鵞流峡復活プロジェクト」という竹林整備団体を立ち上げ、地域、企業、行政が一体となって整備を行いました。

そのうちに「うちの地域の竹もどうにかして欲しい」という要望や講演会などの依頼が急増し、このニーズに対応すべく船頭を辞め、「NPO法人いなだに竹Links」を立ち上げて創業二年が経ちました。

■活動内容

我々が得意としているのは地域との協働です。繁茂した竹は景観悪化、地滑り、道路寸断や獣害など様々な問題を引き起こします。竹でお困りの地域に協議会などを設立していただき、共に整備を進めていきます。

学生とのつながりも重要です。大学生の団体IVUSA（国際ボランティア学生協会）が企画する「伊那谷環境保全活動」と共に活動しています。整備作業の後は、学生と一緒に竹網BBQで盛り上がります。

また、地元の小学校で「竹育」活動を行っています。竹伐り体験、竹いかだ体験、筍を使ったメンマ商品販売などを行い、子どもたちが楽しく竹について学んでいます。

大学生と共に行う伊那谷の竹林整備

前述のメンマ商品は、弊社のもう一つの特徴である竹資源活用において主力商品です。二メートルほどに伸びすぎた筍を収穫し、味付けメンマに加工しています。長野県内と通販で販売していますが、ありがたいことに根強いファンに支えられて毎年売り切れとなります。

そして最近、ポーラス竹炭（土壌改良剤）の販売も始めました。

■メッセージ

川と共に過ごした前職の際に、山と水の循環について多くの気づきがありました。

竹を適切に整備して山や里山を健全な状態に維持することは、私たちの生活に欠かせない水を守る水源涵養保全につながります。

そして、持続可能すぎる竹と対峙していくには焦らず諦めず、活動の中に楽しみを生み出すことが必須だと感じます。

伸びすぎた筍とメンマ商品

○連絡先
〒399-2603
長野県飯田市下久堅知久平349-7
電話／080-2078-1400
https://chikulinks.org/

シリーズ
中部の保護林（第31回）

タテヤマスギが群生する原生林

タテヤマスギ 遺伝資源希少個体群保護林

設定目的

タテヤマスギは、富山県立山（たてやま）地域を中心とする山岳地帯に自生するスギで、同県の木（県木）でもあります。

葉の間隔が狭く雪が落ちやすい、寒さに強い、地面についた枝から根を出して個体（クローン）を増やすなど、様々な特徴があります。

樹齢三百年を超える巨木もあり、原生的な状態で群生するタテヤマスギの個体群の保護・管理をしています。

地況・林況

当保護林は、立山西麓の尾根上にある美女平周辺に位置しており、保護林周辺を含め、タテヤマスギのほかブナ、ホオノキ、ダケカンバ等が混交する天然林が広く分布しています。

所在地
富山県 中新川郡 立山町

国有林野には、世界自然遺産を始めとする原生的な森林生態系を有する森林や、希少な野生生物の生育・生息の場となっている森林が多く残されています。

国有林野事業では、1915年（大正4年）以降、こうした貴重な森林を「保護林」として設定し、森林や野生生物等の状況変化に関する定期的なモニタリング調査を実施して、森林の厳格な保護・管理を行っています。

お問い合わせ先：計画保全部計画課　ダイヤルイン：026-236-2612

※詳細は、コードを読み込んでください。

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第31回

中部森林管理局総務課
井上（いのうえ）　日呂登（ひろと）

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「枝払（えだはら）いと剥皮（はくひ）」

「枝払い」は伐倒した木の枝を落とす作業です。立っている木の枝を切る「枝打ち」と混同されることがありますが、こちらは主に丸太として運び出す直前の作業になります。

昭和初期頃　帝室林野局木曽支局における
斧による枝払い作業

かつては斧や鋸を用いて行われていた作業ですが、昭和三十年代以降は主にチェーンソーによって行われる作業となりました。太い枝がある場合は、その切り方によって木材の価値が左右されることもあり得ます。

昭和30年頃　チェーンソーによる枝払い作業
（現在の木曽森林管理署管内）

「剥皮」（木の皮剥き）は現代では山で行われることが少ない作業ですが、かつては木の皮（檜皮（ひわだ）や杉皮など）を屋根材に利用する需要に応えるため、木材の滑りを良くすることで運ぶ作業を楽にするため、あるいは木材の乾燥を早めるためなどの目的で行われました。

昭和初期頃　帝室林野局木曽支局での
剥皮作業

年代不明　現在の東信森林管理署管内での剥皮作業

プロセッサやハーベスタなどの林業機械が導入されている現代の林業の現場では、枝払いなどの作業は機械的にごく短時間で終わる場合もあります。

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。
これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むか～しの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、コードを読み込んでください。

森林環境税

国民一人一人が、森を支える。

森林環境税

日本の森林は、国土の約七割を占め、地球温暖化や災害を防ぎ、豊かな水を育むなど、私たちの命や暮らしを支えています。この大切な森林を持続的に守り育てていくため、「国民一人一人が、森を支える」新たな仕組みとして、「森林環境税・森林環境譲与税」が創設されました。

？キーワード解説

★「森林環境税」は、令和六年度から、個人住民税均等割の枠組みを用いて、市町村が国税として一人年額千円を徴収する新たな税です。

★「森林環境譲与税」は、森林環境税による税収を原資として、市町村における森林整備の促進のために、市町村と都道府県に譲与される財源です。

森林環境譲与税（以下「譲与税」という。）は、森林整備を推進する観点から徴収に先んじて譲与が開始されており、今年度で五年目を迎えました。全国の市町村では、譲与税の活用により、間伐等の森林整備、人材育成・担い手の確保、木材利用・普及啓発などの取組が展開されており、取組市町村数、活用額のいずれも着実に増加しています。譲与税の使途は、自治体ごとにホームページで公表していますので、地域での取組状況もチェックしてみてください。

林野庁においても、こうした地域の森林・林業の未来に向けた取組を、より分かりやすく紹介するため、十月から林野庁ウェブサイトに写真を多用した譲与税ページを開設しました。また、林野庁公式ＳＮＳにおいても、取組事例を写真付きで紹介・発信しています。是非ともフォローいただき、お目通しいただければ幸いです。

各市町村では、森林所有者への意向調査の結果を踏まえた森林整備や、積立基金も活用した木造公共施設の整備などの取組も始まっており、来年度以降も、更なる取組の進展が期待されます。

林野庁としても、引き続き、自治体の皆様と協力しながら、各地域での効果的な活用に向けた支援に取り組むとともに、譲与税による成果を積極的に広報してまいります。

写真を多用した森林環境譲与税ページを開設

お問合せ先
林野庁森林利用課森林集積推進室
TEL ０３－６７４４－２１２６

編集長だより

（中部の森林へのご意見・ご要望等の投稿は、migoro@maff.go.jpまで電子メールでお送りください。）

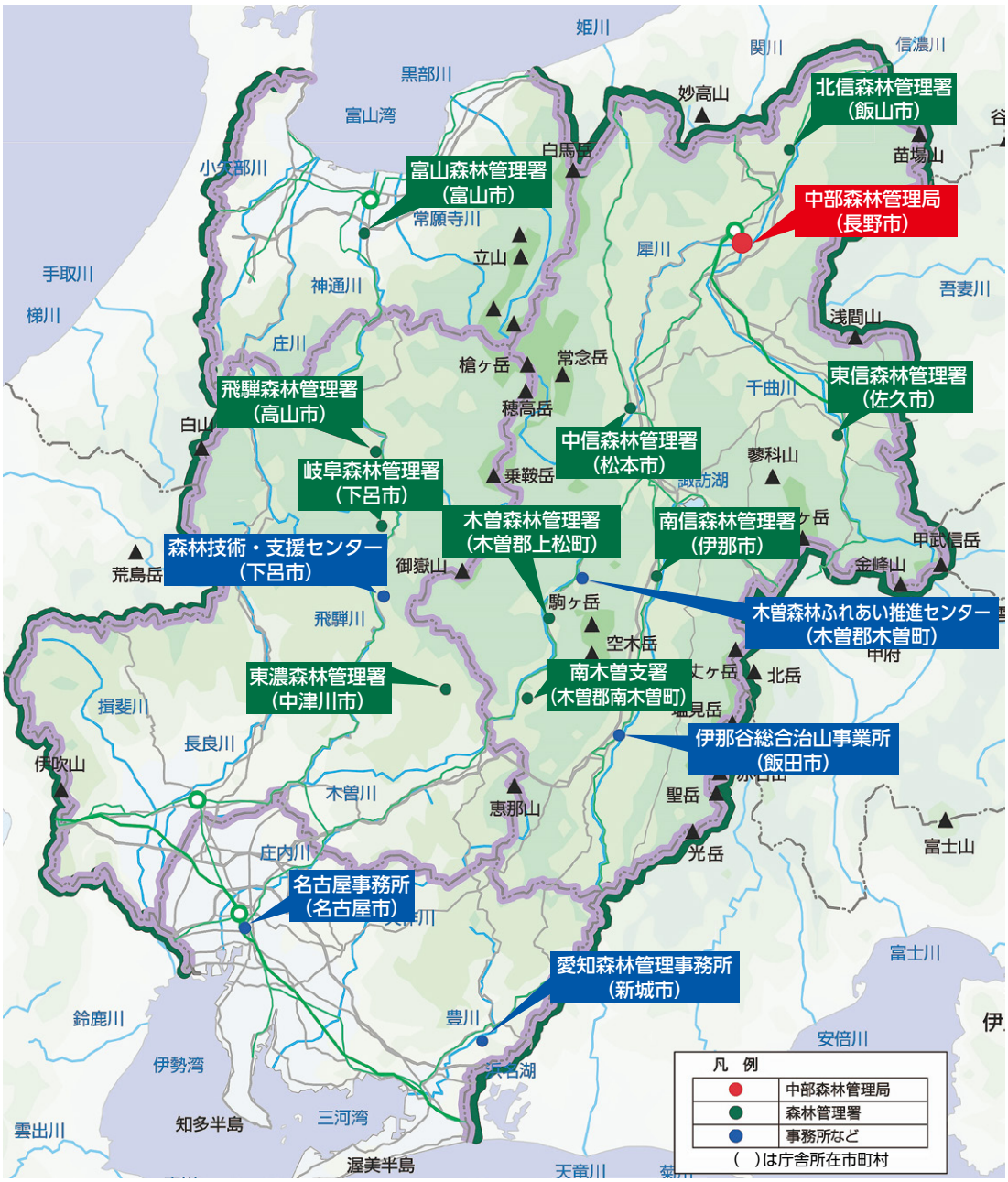
森林を彩る紅葉の時期が過ぎ、また山々の雪景色が美しい季節がやってまいります。

先月、「木材利用実践研修」が岐阜県内にて実施され、木材の流通や加工、活用方法などを現場で見て学ぶ若手職員の姿がありました。また、木曽署管内で開催されたイベントでは、若手職員が企画した「突撃！木曽のひのきはいったいどこへ？」が放映され、木曽ひのきで住宅を建築している方へのインタビュー動画が流れました。

様々な機会を通じ、長い年月をかけて育った木がどのように活用されるのか、直接見聞きできたことは、とても貴重な経験になったと思います。森林や木材の価値をしっかりと把握し、先輩方が育ててきてくれた資源を次の世代に引き継いでいける、そんな魅力が国有林にはあると改めて感じています。

そして、季節ごとに表情を変えながら成長を続ける森林と、私たち職員に成長する機会を与えてくれる皆様方に感謝しております。

82.天生の森から立山連峰と薬師岳を望む（飛騨署）



中部森林管理局のホームページ等へのアクセスは、以下を読み込んでください。

中部森林管理局
ホームページ

広報
「中部の森林」

用語の解説

本誌文中に掲載している主な専門用語・業界用語を解説。

名古屋事務所	〒456-8620	愛知県名古屋市熱田区熱田西町1-20	TEL 050-3160-6660	c_nagoya@maff.go.jp
富山森林管理署	〒939-8214	富山県富山市黒崎字塚田割591-2	TEL 050-3160-6080	c_toyama@maff.go.jp
北信森林管理署	〒389-2253	長野県飯山市大字飯山1090-1	TEL 050-3160-6045	c_hokushin@maff.go.jp
中信森林管理署	〒390-0852	長野県松本市島立1256-1	TEL 050-3160-6050	c_chushin@maff.go.jp
東信森林管理署	〒384-0301	長野県佐久市臼田1822	TEL 050-3160-6055	c_tohshin@maff.go.jp
南信森林管理署	〒396-0023	長野県伊那市山寺1499-1	TEL 050-3160-6060	c_nanshin@maff.go.jp
木曽森林管理署	〒399-5604	長野県木曽郡上松町正島町1-4-1	TEL 050-3160-6065	c_kiso@maff.go.jp
南木曽支署	〒399-5301	長野県木曽郡南木曽町読書3650-2	TEL 050-3160-6070	c_nagiso@maff.go.jp
飛騨森林管理署	〒506-0031	岐阜県高山市西之一色町3丁目747-3	TEL 050-3160-6085	c_hida@maff.go.jp
岐阜森林管理署	〒509-3106	岐阜県下呂市小坂町大島1643-2	TEL 050-3160-6090	c_gifu@maff.go.jp
東濃森林管理署	〒508-0351	岐阜県中津川市付知町8577-4	TEL 050-3160-5675	c_tohno@maff.go.jp
愛知森林管理事務所	〒441-1331	愛知県新城市庭野字東萩野49-2	TEL 0536-22-1101	c_aichi@maff.go.jp
森林技術・支援センター	〒509-2202	岐阜県下呂市森876-1	TEL 050-3160-6095	c_gijutsus@maff.go.jp
木曽森林ふれあい推進センター	〒397-0001	長野県木曽郡木曽町福島5473-8	TEL 0264-22-2122	kiso-fureai@maff.go.jp
伊那谷総合治山事業所	〒395-0001	長野県飯田市座光寺5152-1	TEL 050-3160-6075	

発行：林野庁 中部森林管理局
編集：総務課 広報
〒 380-8575 長野県長野市栗田 715-5
電話：026-236-2531
Mail：migoro@maff.go.jp
http://rinya.maff.go.jp/chubu/

メールマガジンに登録いただくと、広報「中部の森林」を発行日と同時にデジタル版を毎月配信します。
（毎月 10 日発行※編集の都合で、発行日が遅れることもあります）
登録サイト https://mailmag.maff.go.jp/m/entry

本誌に使われている紙は、日本の森林を育てるために間伐材を積極的に使用しています。